

全盲の僕の恩師

高一

僕が中学生のとき、病気によって目が見えなくなってしまうた国語の先生がいました。その先生はいつも盲導犬を連れて歩いていました。最初は目が見えない先生で大丈夫なのかと、疑問に思っていて、不安でもありました。僕は目が見えないなどの身体障害のある人たちを悪く思ったことは全くありませんでした。しかし、目が見えない状態で授業をして、僕たちに勉強を教えるなんて、とても無理なのではないかと思っていました。

しかし、その先生の授業を受けてみると、僕はとても驚きました。目が見えないはずの先生が普通に生徒と話し、点字を使って教科書を読んで、黒板に真っ直ぐに字を書いているのです。その先生のことを知らなければ、とても目の見えない先生だとは気付かないような感じでした。人生の半ばで目が見えなくなってしまう先生は、生きるのもう嫌だと思いい、どこでどうやって死のうかかと考えていた、と言っていました。目が見えなくなると言われたときは本当に嫌で、人に知られたく

ないから、白杖を持って外を歩くのが本当に嫌だった、と言っていました。しかし、どうしても先生は教師という仕事を続けたかったから、とてもたくさんさんの努力を重ねた後、仕事に復帰したそうです。

僕はその先生に、心から感謝しています。その先生は僕にたくさん話をしてくれて、とてもたくさんさんのことを教えてくれました。その先生は国語が苦手だった僕を相手に、とても熱心に勉強を教えてくれました。最初は国語が苦手で、テストでほとんど点がとれなかった僕に、分かるようになるまで、最後まで優しくしっかりと教えてくれました。

たとえ目が見えなくなってしまうても、その人の長所や人間性は変わらないし、たとえどんな困難な状況からでも、努力をすれば実現できることはいくらでもあると感じました。目が見えなかったり、手がなかったり、足がなかったりなどの身体障害でも、それ以外の障害でも、決して不可能の要因ではないと考えます。

どのような障害があつたとしても、前向きに生きようとする強い意志があれば、自分の望む人生を歩んでいけるのではないかと考えます。